

ディケンズ時代の女性 (3)

増 田 秀 男

I. Mrs. Gamp—看護婦

ミセス・ギャンプは、『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*, 1843-1844) に登場する 'a female functionary, a nurse, and watcher' であり, 'midwife' (MC, Ch. 19) である。'functionary' とはこの場合入棺の準備をする人間のことであるから, ミセス・ギャンプは死と病気と誕生を職業とする人間であることになる。職業からして威厳ある善良な女性が想像されるところであるが, ディケンズの描き方はその正反対である。ミセス・ギャンプは, でぶで, 酒飲みで, がめつくて, 食いしんぼで, おしゃべりな我の強い女であり, おまけに, ぐったりしている病人の胸ぐらを掴んで手荒くゆさぶって「神経機能の働きを良くさせ」たり, 気を失った患者の親指を噛んで「意識を回復させ」たりする (MC, Ch. 46) <高等技術> の持ち主である。つまり彼女は <白衣の天使> の徹底した戯画である。そしてこの戯画がイギリス人の想像力に与えた影響は実に大きなものであった。その影響の大きさは, 作中でミセス・ギャンプが常に持ち歩いている傘が gamp (大きくてきれいに巻いてない不格好な傘) という普通名詞になっていることにも窺うことができる。この戯画は大成功だったのである。

一般的に言えばミセス・ギャンプは女性の豊穡の戯画である。つまり彼女は体格, 言葉, 食欲などあらゆる面で <過剰> である。だが, 体格以外の彼女の <過剰> には現実的な根拠がある。まず, ミセス・ギャンプは未亡人だから, せちがらい世の中を生き抜いていくためには当然強くなければならない。言葉の面でも行動の面でも精力的, あるいは攻撃的であらざるをえないのである。次にイギリス人が本格的に看護婦の養成に取り組みはじめたのは 1840 年代に入ってからのものであったのだから, 彼女の看護技術の貧しさには

彼女は責任がない。また飲酒癖について言えば——丁度水兵にとってラム酒が報酬の一部であったように——酒は看護婦という職業の報酬の一部だったのである。この点は上の二点と違って信じがたいことと思われるので〈証拠〉を挙げておこう。

As an official report put it: 'Last, and perhaps most important of all, the habit of drinking strong drinks.....is cultivated by the allowance of one pint, or a pint and half of strong porter daily, or at night only, with one or two glasses of gin for night duty or disagreeable work.' (Abel-Smith, p. 13)

このレポートは1866年、つまり『マーティン・チャズルウィット』が発表されてから20年以上後のものである。これは病院勤務の看護婦に関するものであるが、飲酒は、'monthly nurses'、すなわちミス・ギャンプのように個人に雇われて病人に付き添う人達の場合でも、夜間寝ずに看病するのは大変だからという理由でかなり長い間認められていた特権 (*Ibid.*, p. 10) だった。また、死体の納棺準備などの「不愉快な仕事」については当然の如く酒が振る舞われた。つまりミス・ギャンプはこの点でも世の習いに従っているに過ぎないのである。

一方ディケンズの側からみれば、彼のミス・ギャンプ像は、ある意味で当時の社会の習慣に素直に従って、また、必要に迫られて遅しく、生きている人物を描いているわけだから、誇張と歪曲があるにせよ、リアルなものであった。そして、この点に関するディケンズの姿勢は、1844年の最初のOne Volume Editionの前書きの一節に窺うことができる。

But, although Mr Pecksniff will by no means concede to me, that Mr Pecksniff is natural; I am consoled by finding him keenly susceptible of the truthfulness of Mrs Gamp. And though Mrs Gamp considers her own portrait to be quite unlike, and altogether out of drawing; she recompenses me for the severity of her criticism on that failure, by awarding unbounded praise to the picture of Mrs Prig.

だが内容の吟味に入る前に、まずミセス・ギャンプとミセス・プリッグの違いを明らかにしておこう。ミセス・ギャンプは看護婦であるが、厳密に言えば、中世までは 'religious sisterhoods' の仕事であった看護を宗教改革以降引き受けるようになった 'paid attendants' の一人 (Blackham, p. 84) であり、それに対してミセス・プリッグは 'hospital nurses' の一人である。つまり、二人の違いは付添看護婦と病院看護婦ということになる。次に内容であるが、この前書きではディケンズは、まず、ひどく遠慮がちな形で、付添看護婦像の「真実性」を主張している。この遠慮の理由は、おそらく、『マーティン・チャズルウィット』が分冊出版の形で発表されていた間の読者の反応であろう。そしてその反応の中心となったのは、'ladies' nurses' ——同じ付添看護婦でもミセス・ギャンプよりは一格上の付添看護婦——の中でも良い看護婦と接した中流階級の人達の反応であろう。というのは 'ladies' nurses' には良い看護婦が比較的多かったはずであり、そういう看護婦と接した中流階級の人達はミセス・ギャンプの描写をアンリアルと感じ、抗議したはずだからである。おそらくそのために、ディケンズとしては、ペックスニフを介していれば間接的に「真実性」を主張する必要があったのである。これはあくまでも推測に過ぎないが、ディケンズが、付添看護婦と病院看護婦を分けた上で、病院看護婦の描き方については全く問題がないと言い切っていることから、この推測の正しさは裏付けられると思われる。なぜなら一般に中流階級の人達は、後で詳述するけれども、普通直接に病院看護婦と接触する機会を持ちえなかった、したがって、抗議をする裏付けとなる経験もすることができなかった、はずだからである。

次に同じく『マーティン・チャズルウィット』の1849年の Cheap Edition の前書きを見てみよう。

.....Mrs Sarah Gamp is a representation of the hired attendant on the poor in sickness. The Hospitals of London are, in many respects, noble Institutions; in others, very defective. I think it not the least among the instances of their mismanagement, that Mrs Betsy Prigg is a fair specimen of a Hospital Nurse; and that the Hospitals, with their means and funds, should have left it to private humanity and enterprise, in the year Eighteen Hundred and

Forty-nine, to enter on an attempt to improve that class of persons.

ここではディケンズはまず ‘hired attendant’ と ‘Hospital Nurse’ という形で付添看護婦と病院看護婦をはっきり区別している。そしてその上でミセス・ギャンプ像のリアルさを主張している。ただしここでは付添看護婦について、前には無かった「貧しい病人の」という表現が現れている。つまり、ここでははっきりとミセス・ギャンプは ‘ladies’ nurses’ とは違う種類の付添看護婦であることが認められている。中流階級の抗議の存在は、この点からも確認できるわけである。ただし「貧しい病人の」という表現から、1849年の段階で、イングランドとウェイルズの人口の18.9%を占めていた救貧法の救済の対象であった人達 (Best, p.167) を——つまり当時のイングランドとウェイルズで最も貧しかった二割弱の人達を——想像してはならない。彼らには、彼ら専用の病院というべき ‘workhouse infirmaries’ (以下施療院と呼ぶ) というものがあったからである。ここでいう「貧しい病人」とは、これらの最下層の二割弱の人達よりはるかに豊かな、少なくとも、がめついミセス・ギャンプに付添いの手当てが払える程度には豊かな人達である。

同じように、病院看護婦の病院という言葉から、あらゆる階級の人達が入りする施設を想像してはならない。ここで病院と呼ばれているものは、厳密にいうと ‘voluntary hospitals’ (以下病院と呼ぶ) であるが、この施設も本来貧しい人達のためのものであり、少なくとも19世紀末までは、極貧の人達のための施療院と一般の人達のための救急病院とを合わせたような施設だったのである。『リトル・ドリット』(Little Dorritt, 1855-1857) には交通事故にあったフランス人の旅人が病院で手当てを受ける場面がある (Ch. 13) が、‘Cottage nurse’ ——19世紀半ばから地方で作られた小規模な病院の看護婦——の報告では、入院者として、労働災害にあった労働者や、水難にあった子供等の例が挙げられている (L. M. H., pp. 183-8)。

いずれにせよ病院は、19世紀の間は、篤志家の寄付による基金で運営される慈善的な色彩の強い施設だった。だから1843年の時点でロンドンには病院が11、総ベッド数2,284しかなく (Perkin, p.121), 1851年のイングランドとウェイルズの総入院者数は7,619人しかいなかった (Abel-Smith, p.2) のである。勿論、これらの数字が示しているのは、〈供給〉が〈需要〉

に追いつかなかったという事実である。1891年には病院のイングランド、ウェイルズの総ベッド数は112,750に、施療院のベッド数は22,452に増えており、その後もさらに増えつづけている（Read, p.409）からである。そして、20世紀に入っても、病院は、一般の中流階級の人達が普通足を踏み入れる場所ではなかった。ちなみに‘hospital care’が‘a form of relief’であるという観念がイギリスの中流階級の人達の頭からようやく消えはじめたのは、第1次大戦後のこと（*Ibid.*, p.409）であった。

したがって、ディケンズが病院看護婦については1844年の前書きですでははっきりとその無能さを指摘しているのは、少なくとも貧しい人達の健康を保障するための〈制度〉として存在している病院が——生活環境の整備は別として、国家が国民の健康に責任を持つべきであるという考え方はまだなかった——そこで働く看護婦の質について無関心である事への怒りのためである。だから、1849年の前書きでは、みずから看護婦の養成に取り組むことを怠っている病院〈当局〉への怒りが、1849年に着手された看護婦養成の試みへの言及とともに表明されているのである。

ただし、きちんとした訓練を受けた看護婦を養成しようという試みは——ディケンズの表現からすると彼自身もそう思い込んでいるようであるが——1849年が初めてではない。この試みはすでに1840年にElizabeth Fryによって始められていたし、その後も40年代のうちに幾つかの宗教団体が看護婦養成に着手している（Abel-Smith, p. 19）のである。そして1840年代は英国教会が本格的に教員養成に取り組みはじめた年代でもあった。英国教会の組織である‘National Society’は1841年に最初の教員養成校を開き、1845年には、22の‘church colleges’を持つにいたり（Midwinter, p. 29）、1840年代の末には男21,000、女12,000、助教師5,000の‘national school’ teachersを養成（Blackham, p. 21）している。この点からしても、1840年代は、イギリス人が、きちんとした、システムティックな訓練を受けた人材が様々な分野で必要であるということに自覚し、その養成に着手しはじめた年代であるということができよう。そしてディケンズのミセス・キャンブ、ミセス・プリッグ像は、『マーティン・チャズルウィット』が、ディケンズとともに様々な社会改革事業に励んでいた、Angela Burdett Couttsに献じられていることから見て、その時代の雰囲気を受けて、正式に訓練された看護婦の養成を、諷刺的な戯画という、いわば裏返しの形で、要求する目的を持ったものだったのである。

次に『マーティン・チャズルウィット』の第三の、そして最後の前書き、すなわち 1867 年の Charles Dickens Edition の前書きを見てみよう。

.....Mrs Sarah Gamp was, four-and-twenty years ago, a fair representation of the hired attendant on the poor in sickness. The Hospitals of London were, in many respects, noble Institutions; in others, very defective.....since, greatly improved through the agency of good women.

ここではミセス・ギャンプのような付添看護婦は四半世紀近い過去のものになり、「善良な女性たちの尽力」によって病院看護婦の質も向上したと述べられている。確かに 24 年前に比べれば、いろいろな人達の努力の積み重ねがあったわけだから、付添看護婦と病院看護婦については格段の進歩があったに違いない。だが、施療院については、〈現場〉を良く知っている人の眼から見れば、その進歩は充分なものとは言えなかったようである。なぜならナイティンゲイルはこの前書きと同じく 1867 年に書かれた手紙の中で次のように言っているのである。

.....Miss Nightingale stated that nursing was generally done by those 'who were too old, too weak, too drunken, too dirty, too stolid, or too bad to do anything else'. (Abel-Smith, p. 5)

ここで言われている看護婦は施療院の看護婦である。つまり、ディケンズの作中人物で言えば『オリヴァー・トウィスト』(Oliver Twist, 1837-1839) の冒頭に登場する Mrs Thingummy である。そして、ナイティンゲイルがここに述べている看護婦の状態は、ミセス・ギャンプやミセス・プリッグと同じである。つまり、施療院の看護婦の状態は、24 年前の「貧しい病人の」付添看護婦や病院看護婦の状態と同じなのである。1840 年代から看護婦養成のために注がれてきた「善良な女性たち」の努力は、少なくとも施療院の看護婦に関しては、まだ一向に成果をあげていないのである。そして奇妙なことにディケンズは施療院の看護婦の状態については一切言及していない。ところが同じ前書きの一節には次のような言葉がある。

.....As we sow, we reap. Let the reader go into the children's side of any prison in England, or, I grieve to add, of many work-houses, and judge whether those are monsters who disgrace our streets.....or are creatures whom we have deliberately suffered to be bred for misery and ruin.

ディケンズはここでは子供たちの牢獄や救貧院における環境の劣悪さを指弾している。そしてその責任は上・中流階級の人達にあると言っている。すべてではないが「多くの救貧院」の状況が悪いと言っている。それなのに、いわば救貧院付属の病院である施療院、またその看護婦——つまり、1869年に五万人いたと推定されている 'sick paupers' (Abel-Smith, p. 51) の看護にあっていた人達——については、一切触れられていない。ここには奇妙な〈観察力の低下〉、あるいは認識の甘さとも言うべきものがある。そしてそれはおそらく、ディケンズのなかに、看護婦の質の向上の必要性を説きはしたけれども、施療院の看護婦まではとても無理だろうという絶望感があったからであろう。さらにそれは、ナイティンゲイルのような専門家はともかく一般の識者と共通の感情だったのであろう。つまりディケンズは、ナイティンゲイルのように、〈底上げ〉こそが真の看護改革への道であるということまでは考えていなかったのである。言ってみればディケンズは見切りを付けるのが早すぎたのである。そしてジョージ・オーウェルなら、こういうディケンズの見切りの早さを、中流階級の作家の限界と呼んだであろう。

では、ディケンズがおそらく大多数の識者と共有していたと思われる、底辺にいたるまでの看護改革の実現に対する絶望感の〈正当性〉を確かめるために、ここで簡単に看護婦養成の歴史を見てみよう。まず数の上で見ると、看護婦は、1851年に二万人だったものが、1881年でも38,000人 (Best, p. 121) になっているに過ぎない。女教師の数が1851年に67,000人 (Best, p. 121) だったのが、1881年には122,846人 (Read, p. 26) に増えているのと比べるといかに少ない。理由はいろいろ考えられる。まず教師よりは看護婦の方が勤務時間も長い上に労働も大変だから、そもそも志願者が少なかったであろう。それに、教師の養成に取り組んだのが、主として、英国教会という、当時では最大の全国的組織であったという点も見逃せない。また施療院は納税者から、病院は基金の提供者や運用者から、〈経営優先〉の圧

力があったために養成のための予算が取れなかったということも考えられる。さらに、施療院は勿論のこと、病院も国民全体のためのものではなく、基本的には貧しい人達のためのものであったという点も、看護婦養成の遅れに大きくかかわっているであろう。

いずれにしても看護婦の養成は、少なくとも一部の識者には、必要性が強く認識されていたにもかかわらず、進まなかった。その上、数少ない正規の看護婦は、〈優先的に〉インドをはじめとする植民地へ、また、軍の病院へ送られた (L. M. H. p. 30)。さらにまた、自宅で診療、看護を受けるのが普通であった上・中流階級の人達が、正規の看護婦を待ち望んでいた。そこで、‘private nursing’ と病院看護の間には、報酬面の大きな〈格差〉が生まれた。1858年の病院看護婦の年収の上限は20ポンドだったのに、ほぼ同じ頃の ‘ladies’ nurses’ の報酬は週1ギニーだった (Abel-Smith, pp. 279-280) のである。その上、正規の看護婦の中である程度の割合を占めるにいたっていた中流階級出身の看護婦は、同じ階級の人達の看護を引き受けたがった。つまり、折角生まれた正規の看護婦のかなりの部分は、国家と上・中流階級に吸収されてしまったのである。そこで、1867年になってもまだ付添看護婦や病院看護婦はともかく、施療院の看護婦のあり方には進歩が見られず、ナイティンゲイルがそれを嘆いたわけである。つまり、歴史的に見れば、1867年の前書きの背後にあると思われるディケンズの絶望感、あるいはそこから来る見切りの早さは、残念なことではあるけれども、ある程度やむおえないことであると見ることもできるわけである。

残念なことと言えば、ディケンズは、ミセス・ギャンプ、またミセス・ブリッグという人物を創造した時点で、もっと残念なことをしてしまったと言える。そしてそれは看護婦像の造形の仕方そのものに関係する。確かに、ディケンズの看護婦像は、看護の〈現状〉を批判するという意味では非常に効果的であったと思われるし、そうした現状の改革の必要性を強く識者に訴えるものであった。そして次の文章に見られるように、彼の功績は、看護の歴史の専門家から讃えられている。

Another powerful champion of nursing reform, though neither a doctor nor a nurse, was the novelist Charles Dickens.....His forcible pen attacked, among many other abuses, the degraded condition of the nurses of his time. (Seymer, p. 76)

ここではディケンズは「看護改革の闘士」として、評価されている。そしてこれがディケンズの看護婦像に対する大方の評価である。だが私に言わせれば、問題は、まさにディケンズが「看護婦の墮落態」を描き「攻撃」することによって、世論を喚起しようとした点にあったと思われる。なぜならば、彼の看護婦像は、看護についての ‘menial work for which little training was required’ (Calabria, p. xvii) という通念が非常に強力に存在する社会に向けて発表されたものであった。ナイティンゲイルのように、家庭教師以外の職に ‘women above the working class’ が就くことが、国中の人を驚かすような社会に向けて (Clephane, p. 85) 提示されたものであった。そのため彼の看護婦像は、彼の意図とは裏腹に、結果的には、看護の仕事が「卑しい」ものであること、また、「労働者階級よりも上の階級の女性」が就くべき仕事でないことを改めて確認してしまい、さらに、もともと強かった看護という職業に対する偏見を、さらに強めてしまったと考えられるのである。ディケンズの看護婦像は、あくまでも裏返しの「墮落態」を描くことを目的とするものであった。そしてそのために、ディケンズは、看護という職業の卑小さを劇化し、いろいろな形で強調することに終始した。だがまさにそのことが、マイナスに作用したと考えられるのである。

その後彼の看護婦像は独り歩きを始める。そして、少なくとも中流階級の親たちや娘たちは、以前よりもさらに看護婦という職業を〈恐れる〉ようになるのである。

.....most parents (including the Nightingales) were horrified if their daughters evinced an interest in this type of work, and thus nursing lost a great many intelligent and compassionate women. (Calabria, p. xvii)

ナイティンゲイルが親の反対を押し切って看護を一生の職業とする決心をしたのは1844年だったと言われている。彼女は看護という職業に対する偏見と差別的な意識を身をもって知っていたわけである。したがって、1854年のナイティンゲイルのクリミア行きは、看護婦という職業に対する偏見を除き、良き先例を示すために決断された (*Ibid.*, p. xxii)。そして ‘the lady with the lamp’ の先例に従う女性は少なくなかった。だがもしディケンズが、ナイティンゲイルと同じように、そしてナイティンゲイルに先立って、

裏返しの形でなく、正攻法で、模範的な看護婦を描いていたならば、彼女の良き先例に従う娘たちの数はもっと多くなっていたかも知れない。さらに、その後も、看護の質の向上にどうしても必要であった、多数の、中流階級出身の「知的で憐れみの心を持つ娘たち」が、看護の道を選んでいたかも知れない。つまり、1901年になってもまだ、正規の看護婦は25,000人で、その内中流階級の娘たちは5,000人に過ぎなかった(Read, p. 41)という事態は避けられたかも知れない。なにしろこの当時の女性の就職難は大変なもので、1861年に年収15ポンドの職に810人の応募者が、12ポンドの職に250人の応募者があり、しかもそのほとんどは中流階級の女性であった(Clarke, p. 4)というのだから、〈潜在的候補者〉は無数に存在したのである。必要だったのはむしろ看護婦が「卑しい仕事」だという通念をなくすことだったのである。

勿論、これは仮定に過ぎない。しかし、『マーティン・チャズルウィット』が最初から人気がなく、購読者数が伸びず、ディケンズも悩んでいたという事実からさらに仮定を進めると、『ピックウィック・ペイパーズ』のサム・ウェラーに対すると同じ期待をもって、ミセス・ギャンプという人物が構想されたということも考えられる。そして、そういう事情がなかったら、ディケンズが、〈面白く〉はなくとも、真面目で献身的な看護婦像を選択したこともありうると思われる。そして勿論、客観的に見て、ディケンズの選択肢のなかには——そういう看護婦も現実にはいたはずなのだから——真面目で献身的な看護婦もありえたのである。そしてディケンズが、ただ世論を喚起するというだけでなく、良き先例を示そうという意図を持って、感動的な看護婦像を描いていたなら、看護の質の向上はもっと早く実現したかも知れないのである。

ついでに言うと、ミセス・ギaskellの *Ruth* (1853) のヒロインは、真面目で献身的な看護婦である。そしてここには良き先例を示そうという意欲も窺われる。ルースは、施療院の 'matron to the fever-ward' (*Ruth*, Ch. 33) を身の危険を顧みず志願し、患者たちの看病に努める。だが、ルースは 'the fallen woman' であり、患者のある者は、彼女のこうした自己犠牲的な行為が、罪滅ぼしのためではないかと疑っている。ルースは結局病院での過労も一因となって死ぬわけだが、この真面目な看護婦像は、あまりにも悲劇的である上に、読者の心の中にも、やはり罪ある女の罪滅ぼしではないかという疑いを残す。平たく言えば、特別な〈訳のある〉人でもな

ければ、施療院の看護婦の仕事に身を入れたりはしないという印象が残ってしまうのである。ディケンズのあまりにも喜劇的な看護婦像と同じように、このあまりにも悲劇的な看護婦像も「知的で憐れみの心を持つ娘たち」に看護婦を志望させるインセンティブとはならなかったのである。

II. Mrs Gamp—助産婦

いずれにせよ、ことにミセス・ギャンプは、ディケンズの狙いどおり〈不滅の戯画〉となったのであるが、また同時に、看護婦や助産婦のイメージに対する、〈不滅の〉とまではいかないにしても、かなり長期にわたる打撃を与えた。ミセス・ギャンプの、リアルではあるがあまりにも見事な戯画は、ヴィクトリア朝時代は勿論、20世紀に入ってから、看護婦や助産婦に対する悪いイメージを定着させる原因となったのである。現に Gamp の第一番目の意味は 'A woman resembling Mrs Gamp, a monthly nurse or sick nurse of a disreputable class' (OED) である。この定義ではミセス・ギャンプはあくまでも「いかがわしい」付添看護婦の代表である。しかし実際にはミセス・ギャンプのイメージは、看護婦全体に及ぶものとなった。イメージの世界でもまた、悪貨が良貨を駆逐するのである。

助産婦については辞書的な意味での被害はない。だが、同じような〈被害例〉はある。なぜならミセス・ギャンプのイメージのおかげで、助産婦の登録制を求める法案を審議する議員たちは、助産婦という言葉を聞いただけでミセス・ギャンプを連想し、忍び笑いして互いに肘でつつきあい (Britain, p. 18), さらに、20世紀初頭に初めて出産に立ち合うために病院に向いた医学生は、後に自伝の中で、その時手伝いをした無能な助産婦を、'a typical fat old gamp' と呼んだ (Moscucci, p. 45) のである。

そしてある意味では、看護婦についてよりも助産婦についてのほうが、ディケンズの罪は深いと言えるかもしれない。なぜなら 18, 19 世紀には、助産の独占を目指した男性と、助産を自らの手に取り戻そうとした女性の争いがあり、ディケンズはその争いのなかで男性に加担したと言えるからである。

『マーティン・チャズルウィット』には、助産婦としてのミセス・ギャンプの活動は具体的には描かれていない。それは時代の習慣に従って、暗示されるに止まっている。

It chanced.....that Mrs Gamp had been up all the previous night, in attendance upon a ceremony to which the usage of gossips has given the name which expresses, in two syllables, the curse pronounced on Adam. It chanced that Mrs Gamp had not been regularly engaged, but had been called in at a crisis, in consequence of her great repute, to assist another professional lady with her advice. (*MC*, Ch. 19)

ミセス・ギャンプはここではすでに助産の仕事を終えて眠っている。文中の「アダムに下された呪いを表す名前の儀式」とは、‘labour’ すなわち、このコンテキストではお産である。お産に〈労働〉という名前を与えたとされている「ゴシップス」については後で述べるが、この場面でのミセス・ギャンプは、難産の時に「同業の女性」に助言を与えることのできるヴェテランの助産婦として描かれている。ただし、「同業の女性」の‘lady’は丁寧すぎるから、全体のメッセージは諷刺的であり、助産婦は見下されている。つまり助産婦は、助産婦であるがゆえに卑しむべきもの、笑うべきものとされているのである。そしてこの助産婦観は、歴史的なコンクストからすれば、もともと女性のものであった助産を、再びみずからの手に取り戻そうとしていた女性たちに、さらには、医者として女性の精神、肉体、biology (生理) に市民権を与えようとした女性たちに、打撃を与えたのである。

ここでまず出産をめぐる男女の覇権争いの歴史を見てみよう。中世ヨーロッパでは、女性は医者になることができた。それだけでなく、出産の介助は女性のみがするものであり、男性は亡くなった母親に帝王切開を施すような場合に呼ばれるだけであった。しかしながらルネッサンス後、男の医者が少しずつ出産にかかわるようになり、18世紀初頭には‘abnormal cases’だけでなく‘normal cases’も扱うようになってくる。さらに、1720年代に鉗子が発明されてからは、‘most of the midwife’s better-paid practice’は、男性が扱うようになり、これとほぼ同じ時期に、女性は〈正規の〉医学界から完全に追放される (Donnison, p. 229)。男性はまず〈実入りの良い〉仕事を独占することによって、助産婦の権威あるいは威信をなくし、そのことによって中流階級女性の出産に関わろうという意欲を喪失させたのである。この頃力を得てきた、中流階級女性の〈不労〉という gentility のイデオロギーも、男性にとっては〈追い風〉であった。1736年に John

Douglass という医者がフランスの例に倣って助産婦養成校を設立することを提案したが、この計画は実現しなかった。男性は、女性には ‘capacity, docility, strength, or activity’ が欠けていると称して、女性には訓練の機会を与えず、助産を独占しようとした (Johnson, pp. 12-13) のである。

つまり男性は女性から助産に携わる権利を奪い取ろうとしたのであるが、これと平行して、前の引用文でディケンズがお産に ‘labour’ という名前を与えたと述べている「ゴシップス」を崩壊させた。ここでいう「ゴシップス」とは、辞書的には ‘a woman’s female friends invited to be present at birth’ (OED) である。だがこれだけの説明では不十分なので、もう少しその〈機能〉をはっきりさせよう。「ゴシップス」とは、

‘The term ‘gossip’, which referred to the women attending the birth, is quite revealing of the context in which childbirth took place: originally it meant a formal witness to the birth, but by the seventeenth century it was used to describe ‘a woman’s circle of close female friends’. After the birth, the gossips took over the household chores for a few weeks, thus providing the mother with an opportunity to ‘lie in’, to recuperate her strength in bed while she devoted herself to the care of the new child. (Moscucci, p. 43)

であった。つまり、彼女たちは、単に「出産に立ち合うために」だけではなく、産婦が体力を回復し、育児に専念できるように「何週間か家事を引き受ける」ために「招かれる」、「親しい女友達」なのである。したがって、「ゴシップス」とは、産婦の、もっと言えば女性の、相互扶助的な小コミュニティというべきものだったのである。それだけではない。「ゴシップス」は、同じ運命を分かち合うものとしての女性が作りだした〈制度〉の一つでもあった。

.....the biological realities of frequent pregnancies, childbirth, nursing, and menopause bound women together in physical and emotional intimacy.....These supportive networks were institutionalized in social conventions or rituals which accompanied virtually every important event in a woman’s life, from birth to

death. (Scott, pp. 372-3)

すなわち「ゴシップス」は、同じ〈生理〉を持つものとしての、女性たちの「助け合いのネットワーク」の中心をなすものだったのである。勿論、この〈制度〉の機能は、「助け合い」に止まるものではなかったであろう。それは女性の生理的宿命を中心にさまざまな情報が伝達される場であったばかりでなく、女性が女性としてのアイデンティティを作り上げていくために、また、女性同志の精神的、情緒的な結びつきを強めるために、重要な機能を果たしていた場であったはずである。そしてそういう視点からすれば、「ゴシップス」を核として形成されていたこの「ネットワーク」は、'rivalry' ——これは、お伽話をはじめとする物語から心理学説にいたるあらゆる言説において、女性同志の関係の〈宿命〉とされているものであるが——から女性を開放する役割を期待できるものであったはずである。ちなみに『マーティン・チャズルウィット』でも、ミセス・キャンプとミセス・ブリッグは、最後には 'rivalry' のために喧嘩別れしている (Ch. 49)。女性同志の友情が長続きしないことが、ここでも語られているわけである。

だがその「ゴシップス」——その中心におそらく女性の〈生理〉の権威者として助産婦が存在した——も、前に述べた、助産を独占しようとする男の医者たちに、邪魔者扱いされて消えていく。次に挙げる、'gossip' という言葉の19世紀初頭の用例は、その過渡期における状況を示している。1805 *Med. Jrnl.* XIV. 258 The officiousness of nurses and gossips. (OED) この例文の場には助産婦はすでにいない。だが、ここでは医者と「看護婦やゴシップス」との間にはまだ摩擦がある。医学が経験と同性の連帯の抵抗にあって辟易しているのである。しかし「ゴシップス」、すなわち、助産婦を中心に〈男抜きで〉17世紀以降形成されていた女性の「助け合いのネットワーク」は、その後間もなく完全に消えてしまう。それは、ディケンズの場合で言えば、『ボズのスケッチ集』 (*Sketches by Boz*, 1833-1836) に描かれている 'the childlinen monthly loan society' の活動 (Ch. 6) や、毎朝妊婦の様子を聞きに召使を走らせる習慣 (Ch. 3) に吸収されてしまう。「ゴシップス」は、『ボズ』の時代にはすでに、助産の独占を目指した男性によって——少なくとも上・中流階級では——〈解散〉あるいは〈拡散〉させられてしまっているのである。『マーティン・チャズルウィット』を書いたときのディケンズの意識の中にこの古いほうの意味の

「ゴシップス」があったかどうかは分からない。だがイギリスではあらゆる事に階級による〈時差〉があるのが普通だから、上・中流階級ではすでに消滅していた「ゴシップス」もミセス・ギャンプが属している「貧しい」階級ではまだ残っていて、ディケンズが意識的にその差を描いているという可能性がある。ミセス・ギャンプを訪ねてきた人に周り中から声をかける〈コーラス〉の女性たちの存在は、その裏付けとなるとも思われる。だがお産に‘labour’という名前を与えたのが「ゴシップス」であるという表現からすると、この場合ディケンズの意識にあった「ゴシップス」の意味は、〈姦しい連中〉といった程度のものであろう。

「ゴシップス」の消滅は、Ⅲに述べるような、男性に対する女性劣等説の跋扈と平行して起こった。そして最初に助産婦養成校設立の提案がなされた1736年から130年近い間、助産の覇権争いについては、女性は〈休眠状態〉にはいる。この経過からすると『マーティン・チャズルウィット』が書かれた1840年代は、助産をめぐる争いのなかで、男性がさらに激しい攻撃を加えはじめた年代と考えられる。女性が助産の〈生みの親〉であることが産科学の権威を傷つけるものであるとして、男性のみを〈開祖〉とする産科学の歴史が——勿論男性の手によって——1847年に書かれている(Poovey, p. 40)からである。そしてディケンズの助産婦像も、1840年代のそうした雰囲気の中で、〈一定の役割〉を果たしたのである。

さて助産婦の復権を目指して助産婦養成校設立の母体となる Female Medical Society が作られ、助産婦養成を目的とする Ladies Medical College が創設されるのは、1860年代半ばである。この養成校の目的は、‘ladies’向けの助産婦の養成、中流階級女性の職域拡大、ならびに‘grave social and domestic considerations’に基づく、同性による助産の推進にあった(Donnison, p. 230)。これらの目的のうち、同性による助産は、特に男性による助産が普通であった上・中流階級の女性の希望を受けてのものであった。例えばフェミニストの Josephine Butler は、〈女性の助産には女性を〉という主義を守って、男性の介助を一切受けなかった(Weeks, p. 44)が、フェミニストでなくともそういう女性が増えてきていたのである。

この養成校の発案者も男性の医者であったが、その発想のもとにあったのは、男性の助産が優勢なロンドン全体に比べて、専門の産院の産婦の死亡率が低いというデータであった。一般の病院では医者が他の病人の診療をした

り、時には検屍を済ませてから助産に臨むということがあるので、それが産婦の死亡率を引き上げていると考えたのである (Donnison, p. 230)。だが、これまでの、助産の独占への男性の〈こだわり〉の歴史からすると、この産・病の分離、また、助産婦の養成の発案の背景にあったのは、実はむしろ、

.....midwifery was a time-consuming occupation which interfered with a medical man's other work, his leisure and his rest. (Ibid., p. 231)

という事情だったと見る方が妥当であろう。つまり、特に医者の中だけでも格の高い人達は、時間に関係なく呼び出され、文字通り「暇を食う」助産の仕事を厄介なものと感じるようになってきていたのである。それにまた、医者は、19世紀半ばには完全に法学者、神学者とならんで 'professions' の仲間入りを果たして 'doctor' という呼称も定着してきていた (McCord, p. 229) から、もはや助産婦と競争するのは〈沽券にかかわる〉と感じるようになっていたと思われる。そこで、

.....contrary to current beliefs, women were quite as intelligent and courageous as men, and were fully as capable of midwifery. (Donnison, p. 231)

ということになった。助産〈市場〉の独占が必ずしも得策でないことが男性に分かってきたこの時点で、女性にも「通念」と違って「十分に助産に携わる能力がある」ことが〈発見〉されたわけである。

医学誌 *The Lancet* も、助産婦養成校設立に「少なくとも貧しい階級では、十分な訓練を受けた助産婦を受け入れる余地は充分にある」という理由で賛成した (Ibid., p. 233)。「貧しい階級」とは、まさにミセス・ギャンプの属している階級であるが、1876年の推計では、イングランドとウェイルズの全ての出産の70%は助産婦が扱っていた (Ibid., p. 234)。男性もこの頃にはこうした〈統計的事実〉をもとに、助産の覇権争いを止めて女性との共存を認めるまでに〈成熟〉してきていた——ただし、男性が1ギニー超から10シリング6ペンスまでの豊かな、あるいはやや豊かな階級の助産を扱

い、女性が4シリングの、つまり「貧しい階級」の助産を扱うという条件 (Moscucci, p. 71) 付きではあるが——のである。

しかし、男性の態度は、助産に女性が関わることを〈正式に〉認めた後でも、潔いとは言いがたいものであった。女性——と、訓練されていない助産婦が扱う出産における母子の死亡率の高さを憂えた男性——は、助産婦の質の向上を目指して免許制を1878年から提案したのであるが、それが立法化されるに至ったのは1902年であり、しかも、「正規の助産婦のほうが危急の際に医者を呼ぶ率が高い」から「助産婦のステイタスの改善は医者利益に抵触しない」ことが確認された後でようやく立法化された (Abel-Smith, p. 77) のである。なお、前に述べた議員の笑い——助産婦という言葉からミセス・ギャンプを連想しての笑い——は、この法案を審議する国会で起こったものである。ミセス・ギャンプの戯画がイギリス人の想像力に与えた効果は絶大だったのである。

Ⅲ. 医 者

ところで、助産をめぐる男女間の覇権争いが行われていた時期、すなわち18世紀初頭から19世紀は、また男女差に関する新しいイデオロギーの形勢期でもあった。

It is a notable feature of eighteenth- and nineteenth-century natural history that its practitioners (many of them medical men) increasingly perceived sexual difference as a fundamental distinction within nature. (Lawrence, p. 60)

つまり18世紀の初頭から、イギリス人は「自然の中の基本的な差異は男女差である」と考え、その差の追求に熱中したのである。そして彼らが発見した「差異」は、まず次のようなものであった。

In the new encyclopedias of the eighteenth century, women and men were defined as opposites. Women were emotional; men were rational; women were passive; men were active. Women were gentle; men were aggressive. A woman's virtues were chastity and

obedience; a man's, courage and honor. Women were meant for the home; men for public life. (Anderson, p. 143)

上に引用した文章の前段では、いわゆる二項対立に基づく男女の性質の振り分けがなされている。そして後段では、相補性理論によって、男女の役割と活動の場の区別がなされている。両性はその違いを生かして互いに補いあって生きることの利点が強調されているわけである。勿論現代の我々の目から見れば、これらは「自然に存在する基本的な差」ではない。だが、gentility のイデオロギーに仕える文化的虚構としては、一応〈穏当な〉ものと言えるであろう。しかし、問題は、これらの差をさらに拡大した人達がいたことにある。そしてその人達とは、前に引用したロレンスの文中にもあったように、医学に携わる人達であった。その人達の男女差に関する説を見てみよう。次の例は心理学者の場合である。

Benjamin Rush attempted to outline the 'peculiarities of the male and female body and mind' in a lecture of that title given in 1791. Speaking about women's bodies, he said: 'their sedentary lives.....favour obstructions everywhere' and their minds are by nature inferior to male minds in understanding, memory, judgement and reasoning. (Russell, p. 19)

まず女性の肉体についての、「活動的でない生活のためにいろんな障害が起こっている」という指摘は、gentility のイデオロギーによって「活動的でない生活」に追い込んだのがそもそも誰なのかを棚に上げてしまった指摘で、笑止というよりないが、精神に関して、あらゆる面で「生来男性よりも劣っている」という説は、完全に女性蔑視的である。百科事典の定義の「女性は感情的で男性は理性的」という説は、18世紀末には、大幅に、それも女性の方が劣っているという方向で、拡大されたわけである。

上の心理学者の学説は1791年の例であるが、女性の、心身両面における劣等性に関する理論は、この頃から過激になってきたようである。次の女性誌編集者の嘆きはそれを物語っている。

.....White quotes the editor of the *Lady's Magazine* who in

1825 lamented:

The times are changed.....women.....now seek only to exercise their virtues in domestic retirement.....Writers.....proclaim the mental as well as the bodily inferiority of the weaker sex. (Beetham, p. 18)

上の 1825 年の文章には、女性不勞のイデオロギーと相補性理論と女性劣等説が結合している様子が、また、女性がその圧力を強く感じ、困惑している様子が、明らかに見て取れる。「自然の中の基本的な差異」としての男女差はここまで拡大されわけである。そしてここまで拡大された男女差は、1830 年代では craniology (頭蓋学) によって確認される。男性の方が女性よりも脳は重く、頭蓋は大きい (Helsing, p. 75), したがって男性の方が知的であるという〈学説〉が登場するのである。

そしてこういう言説は、一旦ここまで拡大されてしまえば、あとはエスカレーションがあるばかりである。医学者は、口々に、女性の知的活動は生殖器に行くべき血液を減らしてしまうとか、政治活動に携わる女性は精神病院行きになることを覚悟すべきであるとか、高等教育は女性にとって狂気に陥る危険を伴うものであるとか、生理、妊娠、閉経は病気である (Russell, pp. 12-13) とか、'modest' な女性には性欲はない (Anderson, p. 153) とか言い始めるのである。そして、このように核となる通念がますます過激に断言的になっていく経過には、ディケンズのミセス・ギャンプの描き方と相通ずるものがある。一つの核となる通念がさまざまなヴァリエーションを生みつつ強化され、確固たるものになっていくからである。

上記のような極端な女性劣等説がなぜ主に医学者によって唱えられたかについては、いろいろな見方が可能であろう。だが、この段階では、医学そのものが、'a pervenu profession' と見なされていた (Caine, p. 143) ために、医学者が躍起になって医学の学問としての認知を——男女の差異の相補性を原理としている社会に受け入れられやすい方向で——求めたためと見るのが妥当であろう。医学は、'professions' の一つの柱としての認知を、時代のイデオロギーへの追従によって手に入れようとしたのである。これに似た例は、他にもある。次に挙げる、同じく学問としての認知を求めていた人類学の学説も、時代のイデオロギーへの追従によって学問としての認知を

得ようとした例と言えるであろう。

Can woman's brain function successfully when faced with the supreme rigors of scientific and abstract problems? J. McGrigor Allan answers for the majority in 1869:

In the highest realms of literature and science, man reigns supreme. The inventing, discovering, creating, cogitating mind is preeminently masculine; the history of humanity is conclusive as to the mental supremacy of the male sex. Men carry on the business of the world in the two great departments—*thought* and *action*. (Helsing, p. 77)

フェミニズムの運動は19世紀半ばにすでに始まっていて、'professions' を含むさまざまな領域への女性の進出は、少しずつではあるが進んでいたから、この人類学の〈学説〉にもそのことに関する〈配慮〉がある。しかし、「男性の精神的卓越性」を説き、女性の「思考と行動」の能力を否定するこの極論の背後に透けて見えるのは、時代の支配的なイデオロギーに追従することによって学問としての認知を得ようとする下心である。

医学に話を戻そう。医学の場合、女性劣等説に医学者がかかわった動機は1850年代から変わってきたようである。新たな動機となったのは、女性の医学界への参入拒否であった。次に引くのは、1870年に医学誌 *The Lancet* に掲載された〈学説〉である。

.....as a body they (women doctors) are sexually, constitutionally, and mentally unfitted for the hard and incessant toil, and for the heavy responsibilities of general medical and surgical practice. (Lutzker, p. 9)

女性は、肉体的にも精神的にも、医者としての「重責」に耐えられないとするこの説は、1858年に Elizabeth Blackwell が、19世紀における最初的女医として登録し、さらに1865年に Elizabeth Garrett が女医第二号として登録を果たした後で唱えられたものである。前者は 'Public opinion

should be *made*, not followed.’ (Baker, p. 157) という信念にもとづいて、「1858年10月以前にイギリスで開業していれば、外国の学位の所有者でも医師として登録できる」という医師法の条項を利用して (Wilson, p. 358), また後者は女性の医学界への参入を阻もうとした男性の ‘various devices’ の網をかくぐって (Lutzker, pp. 40), 登録に成功したのであるが、上に引いた文章は、これ以上女性の医学界への参入は許さないという男性の決意を集約した〈学説〉であると言える。もっともこの〈学説〉の効果はそう長くは続かなかった。1877年に5人の女医が新たに誕生し、1881年には女医の数は25人になるのである。

多くの女性が、男性が作りだした様々な〈学説〉や、具体的な抵抗や意地悪にもめげずに医学界への参入を目指したのは、まず第一に、女性には女性の医者が必要であると考えたからであった。だが、それに劣らず大きかったのは、〈第一の性〉が作りだした妄説を通してでなく、みずからの手によって作りだした理論によって、みずからを捉えられるようになりたいという、また、男性が作りだした〈神話〉によって権利を剥奪されてしまった、女性の精神と肉体、さらには女性の〈生理〉に、市民権を与えたいという、願いであつたらう。

上に述べたように、1881年には、女医の数は25人になった。また、1882年には、既婚女性の財産が全て女性のものとなった。そして1885年には、女性はゴルフのフル・ラウンドを——男性の許可によって——プレイできるようになった。イギリスの女性は、1880年代になってようやく、みずからの精神と肉体と所有物に対する権利を回復し(はじめた)のである。そして最後に言うなら、ディケンズの看護婦像、助産婦像、さらに一般に女性像は、多くの場合、女性のこれらの権利の回復に寄与するものであつたとは言いがたいものであつた。

Works Cited

- Abel-Smith, Brian, *A History of the Nursing Profession*, Heinemann, 1961.
- Anderson, Bonnie S., et al., *A History of Their Own*, Penguin Books, 1990.
- Baker, Rachel, *The First Woman Doctor: The Story of Elizabeth Blackwell M.D.*, George G. Harrap, 1946.
- Beetham, Margaret, *A Magazine of Her Own?; Domesticity and Desire in the Woman's Magazine, 1800-1914*, Routledge, 1996.

- Best, Geoffrey, *Mid-Victorian Britain, 1851-75*, Fontana Press, 1990.
- Blackham, Robert, J., *Woman: In Honour and Dishonour*, Sampson Low, 1950.
- Brittain, Vera, *Lady into Woman: A History of Women from Victoria to Elizabeth II*, Andrew Dakers, 1953.
- Caine, Barbara, *Victorian Feminists*, Oxford Univ. Press, 1992.
- Calabria, Michael D., and Janet A. Macrae, *Suggestions for Thought by Florence Nightingale*, Univ. of Pennsylvania Press, 1994.
- Clarke, Patricia, *The Governesses: Letters from the Colonies, 1862-1882*, Hutchinson of Australia, 1985.
- Clephane, Irene, *Towards Sex Freedom*, Bodley Head, 1938.
- Donnison, Jean, et al., *Women's Studies* Vol. 3, No. 3, Gordon and Breach, 1976.
- Helsing, Elizabeth K., et al., *The Woman Question: Society and Literature in Britain and America, 1837-1883*, Univ. of Chicago Press, 1989.
- Johnson, G. W., *The Evolution of Woman from Subjection to Comradeship*, Robert Holden, 1926.
- Lawrence, Christopher, *Medicine in the Making of Modern Britain, 1700-1920*, Routledge, 1994.
- L. M. H., (ed.), *Work and Leisure*, Partridge & Co., 1888.
- Lutzker, Edythe, *Women Gain a Place in Medicine*, McGraw-Hill Book Company, 1969.
- McCord, Norman, *British History, 1815-1906*, Oxford Univ. Press, 1991.
- Midwinter, E. C., *Victorian Social Reform*, Longman, 1982.
- Moscucci, Ornella, *The Science of Woman: Gynaecology and Gender in England, 1800-1929*, Cambridge Univ. Press, 1993.
- Poovey, Mary, *Uneven Developments: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England*, Univ. of Chicago Press, 1988.
- Read, Donald, *England 1868-1914*, Longman, 1987.
- Russell, Denise, *Woman, Madness and Medicine*, Polity Press, 1995.
- Scott, Joan Wallach, *Feminism and History*, Oxford Univ. Press, 1996.
- Seymer, Lucy Ridgely, *A General History of Nursing*, Faber and Faber, 1949.
- Weeks, Jeffrey, *Sex, Politics and Society*, Longman, 1989.
- Wilson, Dorothy Clarke, *Lone Woman: The Story of Elizabeth Blackwell, The First Woman Doctor*, Hodder and Stoughton, 1970.